

堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

御用水を開削した武士たち 竹腰正晴・野呂瀬主税・蔦木伊兵衛

黒川沿いの散策路として親しまれている御用水跡街園は、御用水という庄内川から名古屋城へ水を流した水路の跡である。

お城の堀と御深井の庭（現：名城公園など）にある蓮池は、築城当時は自然の湧き水で満たされていた。しかし名古屋台地の上に城下町ができ半世紀もたつと湧き水が減り水位が下がってしまった。軍事上重要な施設なので御用水を開削して、庄内川からの水で補充することになったのである。

工事は、執政の竹腰正晴、用人の野呂瀬主税、普請奉行の蔦木伊兵衛たちが担当し、寛文3年（1663）に完成した。

竹腰正晴 家老が事業の責任者

竹腰家は家康の命により尾張藩の附家老になった家柄で3万石を領有していた。正晴は初代正信の子で寛永11年（1634）に生まれ正保2年（1645）に父が死亡したので13歳で家督を継いでいる。御用水開削当時は30歳で、延宝5年（1677）に45歳で亡くなった。

家老を工事の責任者に据えていることから、御用水の開削が藩にとりいかに重要な工事だったかが視える。

野呂瀬主税（自宜） 連絡調整に活躍

野呂瀬主税は、初代藩主義直の時に身の雑務などを行う小姓となり、その後献上品や下賜品を取り扱う御進物番を務めた。開削時の肩書である用人とは、殿様や重臣の指示を連絡したり、関係者と折衝したりする庶務的な役割である。このため直接開削工事に携わるのではなく、竹越と蔦木等との連絡調整を担当したと考えられる。

300石を領したが、御用水完成の翌寛文4年に病死しており、没年齢は不明である。

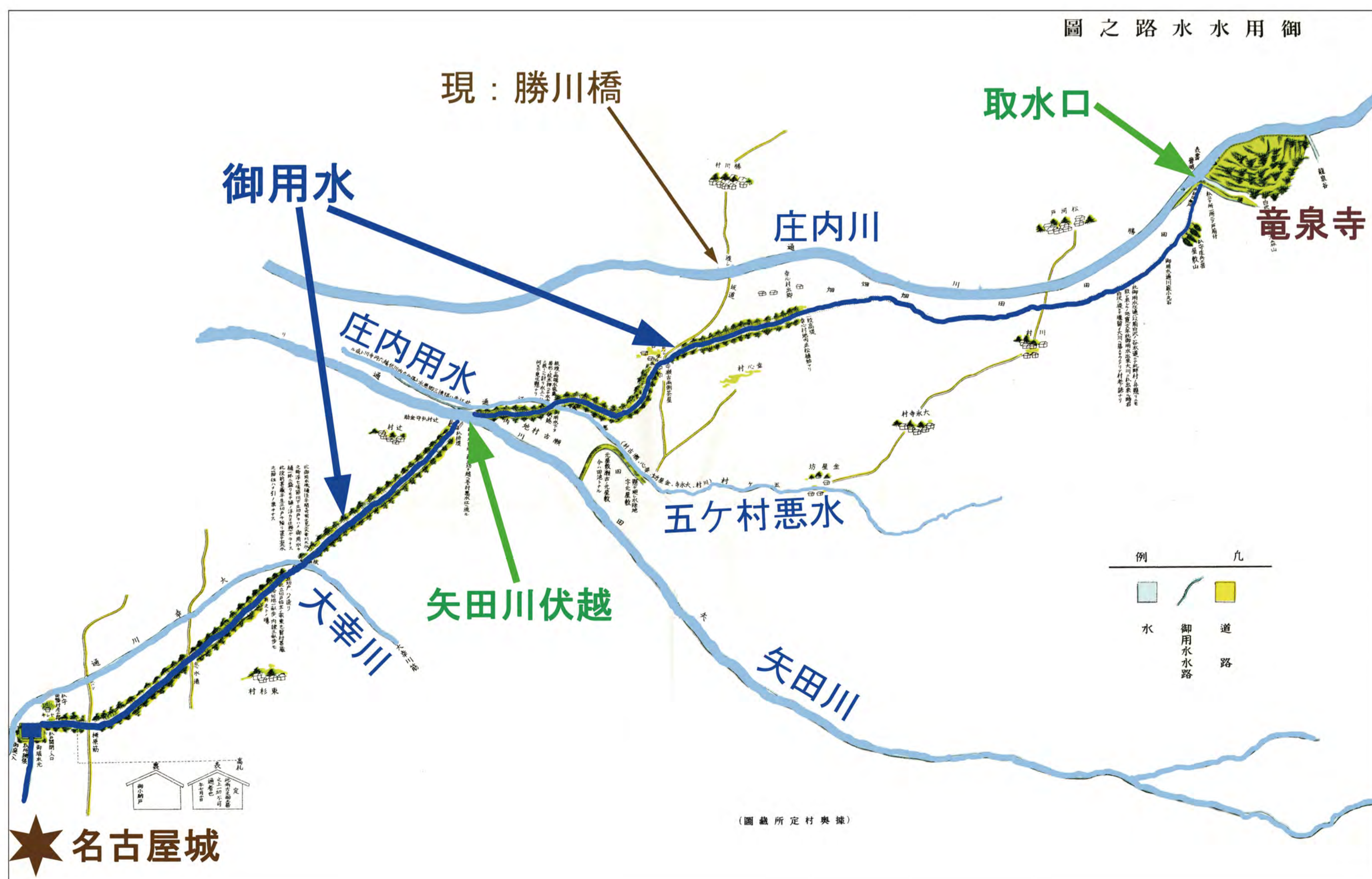
蔦木伊兵衛 工事の計画・進行を指揮し巾下水道布設も担当

蔦木伊兵衛は、最初は御進物番を務めた。その後、建築工事を担当する作事奉行、土木工事を担当する普請奉行になっている。普請奉行の時に御用水の開削工事を実質的な責任者として行い、350石を領したが生年・没年とも不明である。

なお、御用水開削に合わせて行われた巾下水道の布設工事も担当している。



▲ 昭和十年頃の御用水の姿
▶ 散策路として親しまれる御用水跡街園



御用水の様子

取水口

龍泉寺の麓で庄内川から取水した。大雨で庄内川が増水したときに、激流が当たって取水枵（取水ゲート）が壊されるのを防ぐため、上流に猿尾さるおが設けられている。猿尾とは石を積んで造られた岸から川中へ突き出している堤防で、流れを川の中央へ押しやる効果がある。

矢田川との交差

開削当時は庄内川から取水した水を一旦矢田川に流し込み、対岸で再度取水していた。しかし矢田川は天井川なので水路に砂がたくさん流れ込み、維持管理が難しかった。このため、延宝4年に矢田川の下を御用水が流れるように伏越ふせこし（水路トンネル）を造り、立体交差にしている。

大幸川との交差

木製の掛樋（水路橋）で、御用水が大幸川の上を越えた。

岸の松並木

水路岸には松並木が造られた。

御用水の水は巾下水道の水源にも使われるので、日射で水温が上がらないように植えられたと表向きには言われた。一方、秘事としてお城が敵に攻められて落ち延びるときに、松並木で身を隠すためとも伝えられている。